

しの身に叶ひまする事なれば承りまするに依て仰せの義を願ひ
升……赤いや是は千萬忝ない……此間だより拙者は誠に御は
かしき事ぞござるが……何だか……うつくと身体の工合がわ
るいのである、俗に申す懸煩ひである……鱈あれまわ赤川様に
は御じよだん計り仰せられ升る……あなた様が何しに左様な事
がござり升う……赤いやく決してしよだんでない……鱈さん
ならうれが誠でござり升るか……誠でござり升て、いつく迄
でも御氣が替りませねば……私しの様なお多福ではござり升け
れども、何分共に幾久しう宜敷御願ひ申升……赤なにつく赤川
は驚き升た……赤これくそうでない、拙者は御貴殿に惚れた
のではござらぬ……鱈エーそんならあの私しではないのですか
へ……そんならだれに御惚れ遊ばし升たのです……赤左ればで
ある、御身の乳をお上げ申したお春殿に惚れているのである……

鱈あゝマア、そうぞござい升たのです……か赤夫れでどうか甚
だ申兼ねたが、此の手紙をお春殿に渡して貰いたいのである……
是は甚だ失禮でござるが、御貴殿に進上致すから、何卒御貴殿
が盡力を願ひたい……乳母驚いた……仕方がないから、一番是
は錢になるわいと考へ升たから……少し儲けてやろうと思つて
……鱈まわまわそうぞござい升たか……まわをかしい事もござ
い升ねへ……赤何がをかしい……鱈いへくお嬢様もね此間だ
から……お身体の工合が只何どのうぶらくと御わらうござい
升……だから旦那様始め皆々誠に心配してお出でになり升……
お醫者様に掛ると云うと、いやと仰せられ升……何だか物思ひ
の御様子でへ、私が心配し升たのですわ、何と申し升ても御小
さい時分から御父上様だけで、御母様がないので、私しが御乳
をお上げ申して居り升たのですから……どうぞしてお直し申し

たいと、いろく考へ升たら、サアモ一御年頃でもあり致し升
から……全く懸煩ひに違いないと考へ升て……此間だもお嬢様
に内々私しが聞て見升たら……はつきり仰しやいませぬけれど
も、お嬢様はいつでも、あなたの御辱をして御出でに相成り升
参いつでも拙者の話しが出てるか…………御嬢様は御氣性
と致し升て、假令顔、形はどれ程をこせの様な顔でも、侍士と
云う者は武藝さへ出来たらよいと云う事は、常に仰せでござり
升……隣の赤川様の様な御方が殿御に以て一生暮したい、御話
しでござり升……赤川……夫れで拙者は少々顔は不細工なが
……武藝は堀様の高弟で有つたから、能く出来る…………顔は少
々不細工處ぢやあり升せん、餘程不細工です…………赤川は少
らん事を申す……併し此の懸が叶うれば、拙者は充分に御禮
をするから、何分共に萬事宜敷願ひ…………と云うサア是から赤川

は悦び升た……コ一云うぐわいぢや、直に何とか色よき返事を
してくれるで有ろうと待て居り升たが……何の返事も無い、だ
から、乳母に催促をすると、折がないとか、御急がしいとか何
とか云つて返事をしない、だから度々乳母に金をつかます……
乳母は其手紙をお嬢様に渡すてな事は一寸もない……皆乳母が
勝手に讀んで手ふき紙にしてしまふ……何にもならぬので……
餘り赤川は堀が明かぬから、どうしてやろうといろく考へ升
た、すると或る一日の事で、隣の邸でしきりにわあくと大き
な聲で女の笑うてる様ですから…………赤川は何だろうか笑つてる
な…………と庭へ降りて参り升た…………黒板堀の處に節穴がある……
顔の半分眞黒になるのも氣が付かないで見ると…………黒まわく
お嬢様へ皆さんも聞きなさい升…………あんな奴は赤川てな名は
やめてしても顔が黒い依て、黒川と云う名に改めよると、よい

のでござり升……此間だも浦の椽側で三里へお灸を据へるのに
ねへ、墨打するのですけれども……色が黒い者ですから、黒い
處へ黒い者付けても分りませんから……お白粉を以て印しをし
てよるのですわ……恐らく人間でもあんな色の黒い奴がある者
ですやろうか……」とさんく云つてゐる……
……あんな黒い奴は臺灣と云う處へ行たら、土人と云うのがあ
り升う……「まさかそんな事は云ひ升まいけれども……是を今聞
ました赤川は堪まらない、己れつとは思ひ升たが……今はどう
する事も出来ない、モ一斯うなれば破れかぶれ、今に目に物見
せてくれんと考へ升た……頃しも七月の中ば頃……餘り炎熱が
烈しうござり升から……御城下を外れ升た處へ松葉川とて、夫
れには涼み茶屋が澤山掛つて有り升て、盆踊りなどもあり中々
賑か……皆城下より涼みがてら、見物に行く方は澤山あり升

……今岩村の娘お春さんは乳母のお徳と下男のお金助と云う二人
を連れて、是を見物に御出でになり升た……夫れで餘り賑か
すから、遂々歸るのをお忘れになつて、少しくをそうなり升た
四つ少しく前と云うのですから……今の十時には未だならん
で……漸々乳母が……「サア御様子餘りをそく成り升ると、又
お父上も御心配でもあり歸り升る道がさむしうござり升から……
お供を致し升……」と云うので、いよ／＼御歸りになると……今
松葉川の橋を渡つて、二三町來ると、此邊は至つて淋しうござ
り升、何だか此淋しい事は、氣味が悪い様でござり升……」と話
をしながら來ると、今岩村の後ろから矢庭に現われ升たる、大
待士、物をも云わぬに……此のお嬢をどんど一と突き突いた……
「アレー」と云うなり倒れた……乳まわあなたとて來る乳母を、

一と當て當てる、金助は逃げ出し升た……夫れで、さあ、言
うお腹を取て押へ升て、乱暴にも強姦に及ぼうと云う、處へ通
り掛り升たる一人の侍士、此様子を見るなりをどり掛つて參る
なり、尻の邊りを一と討、討つた……振り返つて亂暴侍士、見
れば何つの間に參り升たか侍士一人、是はしたりと云うので、
堪らんから一目散に逃げ出した……だから此侍士は少しく跡を
追ひ升たけれども、モ一何れへ逃たか行方が分りません……だ
から元の處へ歸つて參り侍士、別々に御怪我はござらんか……登ハ
イ誠に有難う存じ升……お蔭様で怪我はござり升せぬ……今暫
くあなた様がお出でがなからう者なれば、ごないな事になり升
かも分りません……ようお助け下し置れ升てござり升……侍不
にく別段にお禮を仰せられるには及ばん……して何れの御方
である……フーム……それで當生駒家の家中で岩村宗助と申す

……して、此夜分にお一人で……参いへ、乳母が……此邊に居
り升から……と云うので邊りをすかして見ると成程乳母は當身
を入れられ升て、氣絶をして……それつと云うので……此侍
士は俄かに活を入れ升たから……氣が付升た……侍お氣が付い
たかお心確かか……侍ハイ有難う存じ升……チ一お嬢様はそれ
にお出遊ばし升か……侍あの徳や此のお武家様にお助けに預り
升た……うなればどうぞお禮を云うてたも……是はくお武
家様何れの御方かは存じませぬ、誠に有難う存じ升てござり
升……あの只今の曲者はモ一逃げ升てござり升るか……只今の
奴は正しく赤川治助と云う奴に違ひござりませぬ……侍何はど
もあれ……拙者は此の城下に田宮小太郎と云道場の方に滞在を
致する侍士……また途中に於てどう云う事もなきにしもあらむ
……幸ひ御送り旁々拙者も、立歸るでござろう……侍有難う存

ヒ升と是から二た足三足参り升たら……足元に何かあたり升た者があるから取上げて見ると……一つの紙入……今の曲者が若しや落したる者にあらせやと……燈籠の火を以て見れば、中に赤川治助とした名紙が這入つてある……借ては推量に違わせ、赤川治助の仕業で有ると云う事が充分に相分り升た……夫れで立歸り升るなり、父岩村に此事を申し升た……だから翌朝此事をお目附中野治郎左衛門殿迄で、紙入を証據に訴へ升た……すゝると只さへ受け思るい奴でござり升から切腹するのですけれど……一等滅じられ、御れん懲を以て百五十石お取上げの上、速時追放申付ると云う、俗に申す阿房拂いと云うのを喰ひ升た……サア赤川に於升ては堪らんから、爰に計らせも殺意を生じ升て、田宮小太郎方に居られ升る、堀大之進と云う人に切り付ると云う……小太郎國宗第二度目の仇討の因縁、田宮後日の仇

討の發端……是から追々と面白うなり升……

○第十七席

エー引續いて申上升が……此田宮の後日の仇討と申し升のは小太郎の仇討より、おつと長うござり升から……とれ位ひ私しが縮めて申上升ても、とても一冊では讀み切れません……だから是は前編と致し升て後編は直に後へ出す事に至し升る……借爰に小太郎の母お辻はと申升と、誠に氣の毒な事でござり升たが小太郎が仇討が出来る、モ一夫れでやれ……と思ひ升た者が……どうく頼ひ付き升た……だから小太郎はいろく介抱をし升たけれども、藥石功を奏せせして寛永の十八年十一月の三日に行年四十一才を一期として死なれ升た、誠に惜しい者でござり升……然るに死骸は最も源養寺の林山和尚を頼み升て、源

入郎の隣りの處へ埋葬する事になり升た……戒名は誠節妙光信
女とござり升……是は今でも源發寺に立派に残つて有り升……
借て爰に高松の家中に堀大之進は源太左衛門の仇討と云う事は
断念しまして、今では小太郎と兄弟になり升た……計らも田
宮方に滞在しての間だに前回申述べ升たる通り、岩村の娘を助
け升た……する者ですから……岩村の方では何程悦び升たか分
りません……夫れから堀はモ一高松へ歸るのでござり升けれど
も、岩村の方から喧かましく言つて歸しません……すると堀は
いつ迄もろんな事を言つては居られ升せんから……どうでもモ
一明日は歸ると云うので、岩村へおいとまに參り升た……大エ
一どうでも、モ一いよく明日は歸る事に致し升たから……今
日はお暇に參り升た……岩いやそれではモ一御歸りになる……
ぬらい困つた事になり升た……大如何云う者でお困りになる……

……岩左ればモ一斯く相成るからには申さでは娘の一大事、命
に係わる事であるに依つて申し升……實は何をお願し申そう……
拙者の娘は此間だより……戀煩ひ……大是は又怪しからん……
拙者の様なる者に……岩いやく左にあらせ……御貴殿には
ござらぬ……田宮小太郎殿に此間だより戀煩ひ……何と御貴殿
に御媒酌をお願ひ申たいと云うのでござる……御聞届け下さる
譯には參るまいでござりましょか……大いやは是は面白い……何
分にも、未だ小太郎殿は幸ひ無妻でもあり、年も未だ若し、男
前もよし、武藝は申する迄でもなく、人間はりこうでもあり、
人受けもよし充分に揃つてる……あゝ云う人に戀煩ひしよと云
うのは……中々感心なる者である……夫れは何よりお安い事……
夫れでは拙者が御周旋をしよ……拙者が女で有れば拙者でも戀
煩ひする……岩御じよだんを……何分に夫れではお願ひ申し升

……夫れでは其由を小太郎殿に申し升う……」と其日は種々御馳走になり升て、大之進は歸り升たが……サア是から大之進は折角明日歸ろうと思つて居り升たが歸れぬ様になり升た……そこで歸つて小太郎に此事を申し升ると小太郎は中々承知させん……小とうして今から私しは女房持つてな事は、何程内が不自由でも致しませぬ……其義計りは折角では有り升るが……よろしく御断りを願ひたい……」と斷つてしまひ升た……私しどもとはぬらい遠いですな……私し共でした位ひなら悦んでもらう……其替りによをした者です……向うからもろうてくれとは言わぬ……中々小太郎はどても貰いとうにない者ですから、大之進も仕方がないから……岩村へ此由を申し升た……するとまた岩村の方ちや是を断われ升ると、娘の命に係ぬると云うのですから大變に心配し升た……どうかして貰うてくれる、工風はあ

るまいか……と云う……そこで堀も余り岩村が氣の毒ですから左様なればと云うので何か……岩村と内々、密談を致し升た……其日は夫れで歸り升たが……夫れから岩村が折々は田宮の道場へ遊びに参り升り……田宮も岩村へ遊びに行く事になり升た……すると岩村の方では娘さんに言ひ付て有り升から……是れお春貴様も此間だから、身体の工合が悪いと云う……田宮に戀煩ひを成したのぢやないか……なに、隠す事はない……當り前だ……彼れ位ひの者なら拙者でも女だつたら、戀煩ひする位ひである……だから夫れにしてやりたいと思つたのである……夫れに付て今時は昔しと違つて媒酌を頼んだり何かするのは随分面倒だから、夫れよりは一層直接に談判をして……而して後に表て向き祝言の盃をなし、又披露をした方がよからうと考へる……がどうぢや……登ければお父上……直接に談判するとか

云うのは、どう云う……風に致し升ので……岩なに其直接に談
判が……分らんのか……難義な事ぢやなわ……直接談判と云う
のは……直々に掛け合うのぢや、其方が勝負が早うていゝ、と
考へる……なに、不義は御家の御法度と申すけれども、親の
許す日になれば、少しもがまわん……どこ言う者ですから、
小太郎が来ると何だか……をかしうござい升から……モ一後に
は小太郎もそれと察し升たから……来ない様になり升た、夫れ
で岩村宗助はこれ娘、どうぢや……出来たか……きいぬ、出
来ません……岩、どう云う者で出来ん出来んと云う筈はない……
据膳喰わぬは男の耻と云う事が有る、夫れに出来ないと云う事
はない筈だ……それに出来んと云うのは、おかしい……全体何
と云うて、くさいいた……爰で云うて見よ……甚そんな事御父上
の前で云われ升者か……」と親鹿鹿と申し升て、返つてそうなる

と子より親のが骨を折つて居り升る……馬鹿が見たけりや親を
見て置けとは能く言つてござり升る、併しどうしても行かぬと
云うのですから……仕方がない……モ一此上は一層の事御城代
を頼んだら、如何で有ろう……といよ、御城代生駒將監殿を
頼む事になり升た……する者ですから、御城代の方より田宮に
此事を仰せられ升るかう……何んぼの事にも小太郎は厭とは云
われ升せん……どう、承知する事に成り升た……するといよ
、吉日を選び升て岩村の娘お春さんと云うのは、田宮小太郎
の家内になられ、升ただから、岩村の方では此上もなき悦びで
ござり升る、夫れでいよ、堀大之進は高松へ歸る事に成り升
た、すると爰に一つの騒動が出来升ると云うのは、是が小太郎
第二度目の仇討です……いよ、モ一明日朝早く歸ると云うの
で、堀は岩村へ暇乞に参り升た、歸り掛け今御家老の生駒采女

様の堀の處迄で來ると、計らきも砲聲一發鳴り渡る……あつと云う間だに胸板の邊りを充分に、討突かる、玉煙りと賭共に追がの堀大之進も挫と討りに、夫れへ倒れ升た……すると此物音に驚いて……生駒采女の邸では……何だかをかしいからと云うので直に來つて見ると、堀の際の處に一人の侍士が倒れてる……是はと云うので調べて見たが……何れの侍士か分らん……曲者はモ、何れへ逃げ升たか是れも分らん……仕方がないから、取敢へて大目附を呼んで檢死をさして、埋葬の手續を成んど云う……すると田宮小太郎は斯かる事とは知らば……こそ今晚は門人の田中清三郎と云人の處へ元服の祝ひで、よばれて行て居り升た……今下男を連れて大名小路迄で來ると……何だか……埋燈が澤山見へる様で……漸々夫れへ來ると、こはるも如何に今夫れに倒れて居り升のは堀大之進……小ヤ、小ヤ、是はしたり大

之進殿……と云うなり暫しの間だは言葉もなし……何者が斯かる事を致した……と云われ升たが、モ、充分に討たれてる故に返答がございませぬ……すると夫れへ一生懸命掛け付て参り升る一人の侍士……侍ヤア……夫れへ御出でに成り升のは田宮先生ではござり升ぬか……小ヤ、是はしたり近藤氏……何事ぞござる……近只今赤川治助が参り升て……奥様を殺して遂に致し升てござり升る……お早く御歸りを願ひたし……小エ、小エ、こはまた何事である……借ては此の堀を殺したも赤川の仕業なり……何はともあれ跡の處は近藤……とも角此堀の死骸を引取りくれ升る様に……近そんなら堀様も……飛道具で……小近藤頼むと云うなり、小太郎は一目散に道場へ歸つて参り升たが……モ、曲者は何れへ逃亡したか分らない……今小太郎は女房の死骸を見ると充分に切つてあり升から……とても歸る氣使ひない

……あゝ今日は何たる悪日ぞとなげき升たが……是非に及ばせ
 ……早速岩村へ此事を知らし升た……すると岩村のなげきは一
 と方ならぬ事ぞござり升……假令如何に有ろうとも……弟の仇
 女房の仇、草の根を分けても探し出し赤川を討たて置くべきと
 俄かに堀の死骸は高松へ送り、道場を片付て仕舞い升て仇討に
 發足をする事になり升た……すると赤川は京都に何でも逃てる
 に違いないと云うのですから……一と先づ京都の方へ参り升た
 ……京二條の富小路に小太郎の以前源養寺に居り升た時分に寺
 男して居り升た……甚平と云う者が今其屋をしてる、是へ便
 づつて参り升た……うこで表向きは、京都見物と云う事にして、
 毎日々々敵の様子を探してゐる、すると、或る一日の事雨が降り
 出し升たから、そこへも出せに内に居り升た……すると其屋甚
 平歸つて参り升た……甚いや……小太郎様今日は雨が降り升る

から……どこへも御出ましに成りませんな……エー小太郎様は
 相變らぬ刀劍者は好きですかいな……小相變らぬ好きである
 ……甚左様なればはら、よろしい刀が一本出升たが……どう
 ぞござり升……はらい上等ですから……小ハ、アどう云う刀だ
 ……甚は是でござり升……小拵へ付きたな……是は在銘だろ
 うな甚エー何だか……貞宗だとか仰せで……へい直段百二十兩
 だと云うので……小フーム……「と」か小太郎は考へ升る事が有
 り升て……小然らば此の刀は直打は有るようだが……是れ位ひ
 の金の物であるから……賣る人は何で……何と云う名前で有つ
 て、何れの人か……聞て來れとならぬ……夫れさへ分れば……
 買つてもよい……甚へいへい夫れでは聞て見升でござい升……「と」
 暫くして歸つて参り升た……小エー聞て参り升た……何でも四
 國だろうで……委しい事は仰つしやいませんけれども、此向う

の丸龜浪人で道場を開いている、小谷園右衛門と云う人が有り升
 ……無敵流の名人だそうで、夫れへ此間だから来てお出でなさ
 い升のですから、をよかた讃岐の人でしよ……小して名は何と
 云う……甚名前は赤澤喜助と云う……」と聞て小太郎はいよ
 怪しいと思われ升たから……小フム夫れでは其の赤澤と云う
 人は年頃三十八九……四十前後で少し色の青い中肉中背と云う
 のぢやないか……甚へい／＼左様ですヨ御存知ですなア……し
 小して左りの目の上の處に一寸した、はくろが有るだろ……し
 て聲は少し講釋師の様な聲であらう……甚どうもよく逢ひ升、
 其通りで御馴染ですか……小女房と兄弟の仇ぢや……甚エーつ
 小一變拙者に逢わしてくれん譯に行くまいか……併しどうも顔
 を付き合すと云う譯には行かぬ……だからどつかへ出て行く處
 を、うつと見たい……甚エー成程宜敷ござり升……夫れではど

つこかへ連れ出し升う……どうです……夜分でもだいたいござい
 升んか……小夫りや夜分でもよい……甚うんならヨ一致し升う
 ……今晚金が道入升と、膳所浦と云う處へ女郎買に行くのです
 ……だから彼の入阪神社の前の處か……チーううです……四條
 の橋の真中です……いよ／＼赤川とか云う敵に逢いないと云う
 のでしたら……就取るとう事になさい升……る様に……小ム
 一ム夫れでは、そう云う事にしてもらをう……」と云うのでサア
 ……其晩には首尾よく貸屋甚平が此の侍士を連れ出すと云う……
 小太郎は其跡より付て来る、果して是が正しく……赤川治助で
 あるか……一寸一ふくして申上升……

○第十八席

時は寛永十九年一月廿一日の夜の四つ鐘をい……今四條の橋の

真中に於て侍りに侍たる小太郎國宗……暫くすると、茂屋甚平連
れ参升たる、一人の侍士見るなり、小太郎は大音聲「やわ珍らし
や赤川治助、先刻より此處に於て侍受けたる、いで……堀大
進と女房の仇尋常の勝負致さんと、呼わつたる時には、遺がの赤
川も驚き升たが……仕方がないから……二た討三討討合升たが
……とても叶わん……どうもろくも討たれ升た……直に小
太郎は二人の恨を晴し升た……早速首を上げて奉行所へ此事を
訴へ升た……サアうれで、茂屋甚平へは禮として金五十兩を使わ
し升た……一時は場所柄ですから、大變に騒ぎ升た……サア是
から小太郎は一と先づ丸龜の方歸り、此由を殿様始め一同に申
し升て……是か水戸の御本家なる高松へ堀の仇討をなしたる事
を申して來り升た……すると高松の方では小太郎の歸るのを
侍衆……水戸家より御隠居の御召しに依て、早々常州茨木之郡

水戸へ参る小太郎國宗不幸にして廿一才の時切腹せんければな
らぬと云騒動が出來升と云う……是が田宮の三代と相成り升る
……余り長く相成り升るから前編は此の位ひにして、又後編に
委しく田宮三代記後日の仇討として申上り……入し御退屈様
で……す……

明治三十四年一月廿八日印刷
明治三十四年二月五日發行

金比羅河生
田宮之仇討



講演者 氏原魯生

發行者 此村庄助

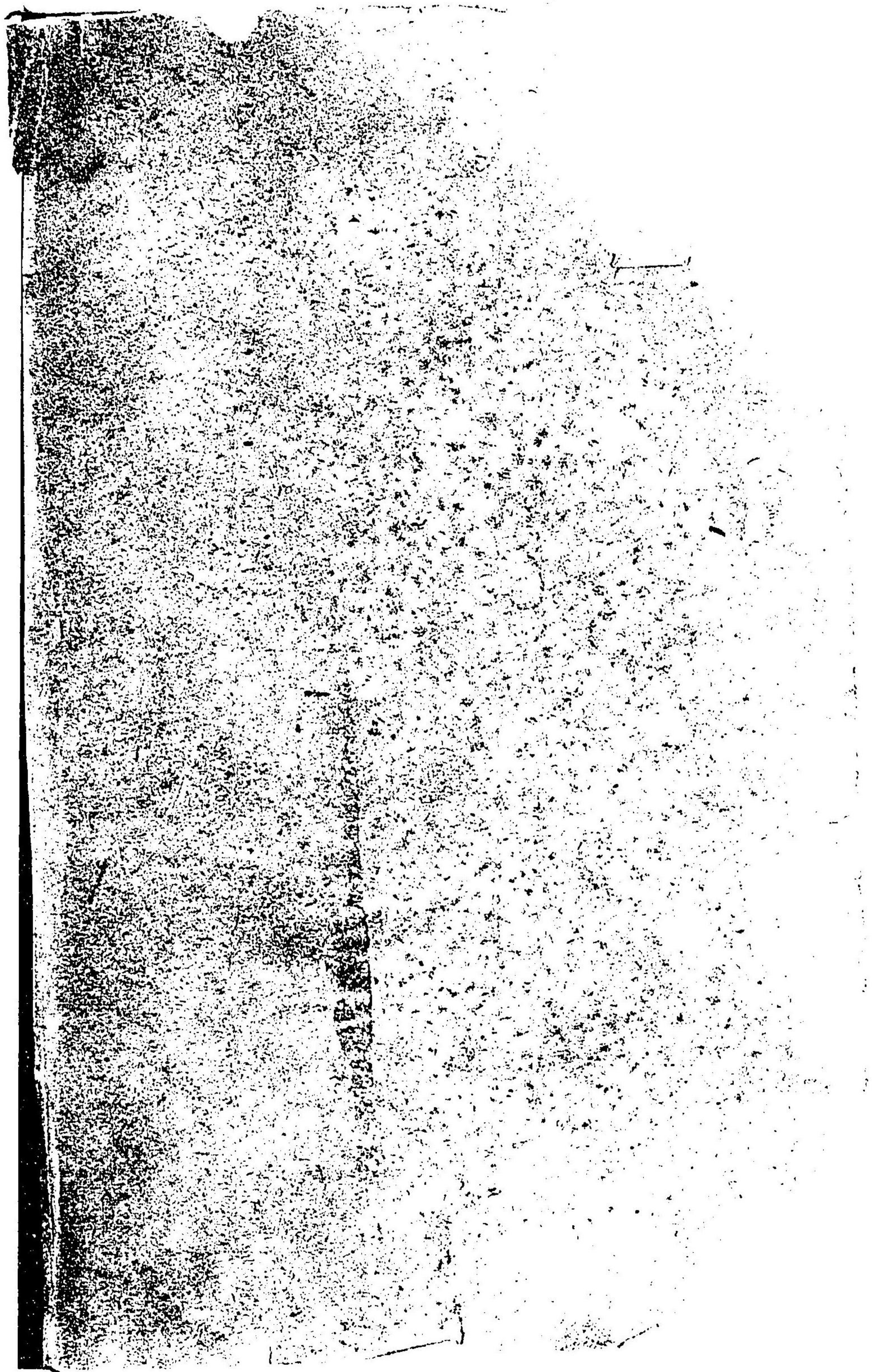
印刷者 矢野松吉

印刷所 大阪製本印刷株式會社

發賣書肆

大阪市南區心齋橋通
順慶町北へ入

此村欽英堂



097341-000-4

特9-398

田宮の仇討(金比羅利生記)

武原 魯生/講演

M34

DBS-1212

